

八女手すき和紙

平成27年 1月8日

八女伝統工芸館通信

第01号

【八女手すき和紙の歴史】

八女手すき和紙の歴史は九州で最も古く、日蓮宗の僧・日源上人（にちげんしょうにん）が全国行脚の途中、八女の地に立ち寄ったことから始まったといわれています。

八女は矢部川が流れる自然豊かな土地。日源上人は、矢部川の清流や和紙の材料となる楮（こうぞ）や三桮（みつまた）が自生していた地理的環境から、この地域が紙漉きに適していると考え、越前国（現・福井県）に伝わる紙の技術を伝えました。

これは文禄四年（一五九五年）、今から四〇〇年ほど前になります。また、隣接する筑後市溝口にある福王寺には日源上人の銅像が立っており、和紙を漉くのに使用する竹簀（たけす）を首から下げています。

一方、豊前・筑前の戸籍用紙として使われていた和紙の断片が正倉院に残っていることから、一三〇〇年ほど前の奈良時代には、和紙の技術がすでに八女地域にも伝わっていたのでは、という説もあります。

最盛期であった明治の終わりから大正の半ばには、二千戸もあった手すき和紙工房は、現在、八女市柳瀬（やなせ）地区、宮野地区、筑後市溝口地区の八戸の工房で漉かれています。

一九七二年（昭和四七年）、福岡県指定無形文化財

一九七八年（昭和五三年）、福岡県指定特産民工藝品指定

【楮について】

和紙の三大原料と呼ばれるものには、楮（こうぞ）・三桮（みつまた）・雁皮（がんび）があります。この中で、楮の繊維が一番長く、次に三桮、雁皮の順となります。

八女手すき和紙は長繊維の楮を主な原料に和紙を作ります。楮は桑（くわ）科の落葉低木で、成木は三メートル余りになり、栽培が容易で毎年収穫できます。毎年冬に、株から一年生の枝を刈取ります。冬に収穫するのは、成長がゆるやで繊維の質が安定

平成27年1月8日

八女伝統工芸館通信

第01号

している時期なので、また年数が経つと繊維が硬くなり傷も増えるので一年生のものを使用します。

楮の幹や枝を蒸し上げ、外皮をはぎその皮の繊維が和紙の原料となります。皮は木全体からすると約一五％で、わずかな量しか採ることができません。この皮を乾燥させたものが黒皮（くろかわ）と呼ばれます。

八女地域には昔から楮が自生しており、少し前までは地元で楮の収穫をしていましたが、現在では近隣の熊本県山鹿地方の楮を仕入れ、黒皮の状態から加工し使っています。

楮は工程を経るごとに不要な部分を取り除かれ、原木の四％ほどが紙になります。

【八女手すき和紙の特徴】

原料となる九州の楮の特質が、そのまま八女手すき和紙の特徴となつています。楮を原料に使うと、丈夫な和紙が出来ますが、楮の中でも九州の楮は繊維が長い特質を持ちます。繊維の長さは通常四〜五ミリ、九州産の楮は長いもので七〜十ミリほどあり長さが不均一であることが強さの秘訣です。

八女手すき和紙は「引きのある粘りのある紙」と言われ、表装用の裏打ち紙などの表具・補強用に使われ、書画、障子紙、版画、油絵などのほか、その伸縮性と強度をいかし様々な民芸紙、さらに加工して素材としても幅広く使われています。原料である九州産の楮は、織

維が長いのでその原料の下処理にとっても手間がかかります。楮の繊維をほぐし、細かく処理する八女独特の過程があり、各工房によって処理の仕方が微妙に違いますし、工房によって漉かれる和紙も、少しづつ種類や用途の違う和紙が作られています。

【「和紙」（わし・わがみ）】

まず紙には和紙と洋紙があります。何をもって和紙と呼ぶかは、とても難しいもの。簡単に言えば、木材パルプを細かく砕き、この原料を糊で固めて形づくるものを洋紙。

和紙は楮・三桮・雁皮などの、表皮にある韌皮（じんぴ）繊維を原料としているもので、漉く際にネリ液を使います。洋紙は

八女では楮のことを「かこ」とも呼び、昔は矢部川でかご踏み（楮踏み）をしていた。

③かご炊（た）き…アルカリ性薬品を煮釜に入れ、素材を約二時間ほど煮ると、リグニン・ペクチン質と呼ばれる物質が溶かされ、繊維質だけが残る。

※アルカリ性薬品Ⅱ苛性ソーダ、ソーダ灰など。昔は木灰、石灰、貝殻灰を使用していた。

④あく抜き…煮た楮の皮を釜から取り出し、繊維でない物質、薬品、灰汁などが完全に抜けるまで水に晒す。何度も水を変えなが一昼夜ほど水に晒していく。

⑤漂白（ひょうはく）…白い紙を漉く場合には、漂白液（カルキ）を加え原料を漂白する。

昔は矢部川河川敷で天日干し

をして、紫外線によって白くしていた。

⑥水洗い…真水に素材を晒し、染み込んだ漂白液が完全に抜けるまで水を入れ替えて、水洗いをする。同時に、残っているチリやゴミ、キズの部分も丁寧に根気よく手で取り除いていく。

※黒皮の下層の繊維質を白皮（しろかわ）という。この段階で白皮に溶剤が残っていると、製品となった和紙の変色やシミ、劣化の原因となるので十分にすすいでおく。

⑦かご打ち…水洗いした楮を絞ったあと、繊維をほぐすため、打解機で約二時間ほど叩く。昔はかご打ち棒で二人一組で叩いていた。夏場は暑く、冬はあかぎれ、ひび割れの手から血が滲む

重労働だったという。

⑧離解（りかい）…繊維を細かくバラバラにするため、離解機「なぎなたビーター」の水槽に水を貯め、その中に原料を入れて高速回転でかき混ぜる。ビーターには、なぎなたのような刃が付いており、この刃が回転し繊維をバラバラにしていく。

⑨紙漉き…漉き舟の水槽の中に真水と適量の「ねり」を入れ、原料をよく混ぜ合わせ、簀桁（すげた）に簀（す）を挟み一枚一枚漉きあげ、紙床（しと）に板に積み重ねていく。縦横にすばたを動かして目を作り、原料を均一に流し込みながら、簀の透け具合を見ながら同じ厚さに漉していく。

⑩紙床（しと）しぼり…漉いた

不透明で、耐水性があります。和紙は透明性があり、逆に耐水性がありません。これは和紙の原料である植物繊維は、繊維同士がくっつき合う性質を持っており、これが和紙ならではの破れにくさ、強さに繋がっています。この植物繊維のセルロースは、水には溶けません。馴染む性質を持っていますので、濡れた和紙は逆に破れやすくなります。耐水性はありませんが、和紙は耐久性があり、半永久的に保存に適し、奈良時代の書物が現代でも残っています。

また和紙には機械漉きと手すきの和紙があります。機械漉きだと均一な紙が大量に出来ます。手漉きになると一度に漉ける数も限定されます。しかし人の手

で漉くことで、より繊維が複雑に絡み、丈夫な紙が出来ます。また和紙独特の風合いも、一枚一枚個性が出て味わい深い紙になります。

昔から和紙は紙縷（こより）糸にして羽織など衣服や小物にも使われてきましたが、現在では和紙自体に加工を施し様々な用途で使われるなど素材としても注目されています。

現在、身の周りにある紙のほとんどは機械で作られた洋紙です。品質が一定し、何より価格が安く大量生産・大量消費されています。

現代社会において、手すき和紙がこの先どう進んでいくのか、難しい問題です。しかし、日本文化の中で育ち、その文化を支

えてきた手すき和紙は、経済効率だけでは計れない、紙というものを超えたものを含んでいます。その柔らかで軽さを持ちながら、強くて優しく光を通す柔軟性。その風合いは、洋紙にはない独特の温かさがあります。

【八女手すき和紙の工程】

①原料…楮・三桮・雁皮の三大原料を用途により使い分ける。

八女では楮を中心に和紙を作っている工房が多数を占めます。

楮の和紙は丈夫な和紙が出来ますが、楮の中でも九州の楮は繊維が長く、「引きのある粘りのある紙」と言われている。

②水浸（つ）け…原料である楮の皮を、水に浸けて柔らかくし、チリやゴミなどを洗い流す。

湿紙は、紙床に積み重ねておき、ある程度水分が自然に抜けたところで、圧搾（あっさく）機で五〜六時間かけてゆつくり絞り、約三分の一くらいの厚みになるまで和紙が痛まないように徐々に水分を絞っていく。

⑪乾燥：圧搾が終わった紙（湿紙）を一枚一枚はがし、乾燥器にハケで貼りつけて鉄板で乾かす。乾いたら、一枚一枚はがしていくが八女の場合、鉄板に張り付けた面がつるつるしているので表とする場合が多い。

⑫仕上げ：乾燥した紙は、一枚一枚丁寧に選別して仕上げる。手触り、紙のしなる音、光の透け具合など五感を使って、紙の厚み、キズがないかチェックしながらより分けていく。

紙を漉く、主な十二工程のうち、原料作りには八工程費やし、原料作りに多くの手間がかかります。楮の皮から、不純物を取り除き、繊維だけを取り出し使います。工程のうち多くが水を使つての作業です。

【八女の手すき和紙のサイズ】
手すき和紙の寸法・サイズは、紙を漉く簀の大きさによって決まり、その簀は産地各地でそれぞれ違うので、定まった法則はなく、個性豊かになっています。

「一般的な和紙サイズ」
八女の一般的なサイズは二・三判（にーさんばん）と呼ばれ、二尺×三尺の約630×960ミリサイズのこと。

「画仙紙の全紙」

書画を書くための大型の紙で、中国では宣紙、又は箋紙・撰紙・仙紙とも呼び、八女では画仙紙全紙と呼ぶ。※日本では明治中期以降、紙商仲間「仙」の字が使われたことから仙を当てる場合が多い。

サイズ…約1, 366×670ミリ

「半紙（はんし）」

もともと全紙を縦半分に切つたものであり、書道・包装紙としての用途が広く、書道半紙や画仙半紙などによってサイズが微妙に違う。

「書道半紙」
サイズ…約334ミリ×242ミリ

「画仙紙半紙又は全紙半紙」

サイズ…約683×670ミリ
「半折（はんせつ）」

全紙判の長辺を縦半分に切つた紙で、半折とも呼ぶ。

サイズ…約1, 366×335ミリ

「襖（ふすま）紙」

さぶろく判とも呼ばれ、三尺×六尺サイズで、襖サイズの大形の和紙。

サイズは約970×1, 880ミリで、このサイズの簀と簀桁を使って漉くが、現在八女では、漉く人も道具自体も少なくなっている。

（文：S・H）

【和紙の厚さ】

「単位…匁（もんめ）」
和紙は重さによって選別し、

匁という単位で分けます。一匁

は3・75グラムで、昔ながらの紙揃え作業で手触り・目視・音など五感を使った選別方法でわけられます。紙の種類によって、匁の分け方も変わります。

※特殊な「山鹿燈籠」に使われる厚い燈籠（とうろう）紙は、逆に指先で判別出来ないもので、秤によって選別されます。

【道具について】

「原料作りの道具」

①かごたくり包丁：チリ取りの際、楮に残っている皮やキズの部分を取り除く刃物。

②打解機：原料の楮の繊維を、叩いて柔らかくする機械。昔はかご打ち棒で叩いていた。

③ナギナタビーター：水と原料

を入れ、混ぜ合わせながら、ナギナタのような刃で楮の繊維を、細かくしていく機械。

「漉く道具」

①簀：和紙を漉く道具で、主に真竹でできた細い竹ヒゴで作られています。竹ヒゴを強靱な生糸で編んでいます。二尺×三尺判の簀を編むのに、2千本ほどの竹ヒゴを使い、和紙の種類によって、ヒゴの太さも違います。簀作りには0・5ミリの極細のヒゴが使われます。

②簀桁：簀を間に挟んで、これで紙を漉いていきます。水の中で使うため、錆びにくく適度な弾性も兼ねた銅が使われます。

③漉き舟：漉き槽ともいい、この容器に和紙の原料と、水とネ

【八女手すき和紙の現在】
 「昔から続く山鹿灯籠・和傘・表装用裏打ち紙」
 八女手すき和紙は、八女地域はもちろん九州一円で使われ、遠く海外にも輸出されるほど、需要の多いものでした。文字を書くのはもちろん、チリ紙・軟膏紙・湿布紙、紙布（しふ）、苗物を育てる温床紙（おんしゅう）紙、和傘など様々な用途に使われ、生活になくてはならないものでした。

また工芸の盛んな八女地域では、「八女提灯」の火袋のほか、「八女福島仏壇」の下地、そのほか多くの工芸に使われていました。現在では、多くの和紙が別の素材に変わっていますが、今でも山鹿灯籠・和傘、表装の

裏打ち紙に使われています。
 「国宝修復」
 現在、和紙は国宝美術品の修復にも使われています。洋紙はもともと空気に触れ酸化、劣化しやすい成分が含まれていることから、和紙に比べて長くは持ちません。

世界の洋紙でできた歴史的書物が虫食いや腐食により劣化し深刻な問題となっており、また天然素材だけではなく、化学薬品も多く使われており、その成分が美術品を傷めるので、修復に使われる和紙は特に原料にこだわって作られています。

奈良時代の和紙が、今も正倉院に残されているように、大切なものを残していくのに和紙はなくてはならないものなのです。

【商品・パッケージ】
 和紙の持つ、あたたかさ・風合い、そして素材そのものの特質を活かして、新たな製品も作られています。隣接するみやま市で伝統を守る線香花火会社が、同じ地域にある八女手すき和紙を使っていたり、お酒のラベル、石鹼のパッケージなど商品をより魅力的に見せる素材として、また作り手の思いを届ける役割も担っています。

その他にも障子はもちろん、壁紙や照明など住宅建材などの産業紙としても使われています。

リを入れよく混ぜ合わせて漉く準備をする。大きな風呂桶のような容器。

④スボ：漉き上げた和紙を紙床に重ねる際、和紙同士を分ける目印の役目をする。

⑤おなもみ：簀を洗うタワシ。「おなもみ」という植物の実を集めて作り、漉き道具の手入れに使う。原料の繊維などをトゲにくつつけて取り除き、タワシより効率よく取り除ける。その形状から手漉き和紙業者では「もぐら」と呼ぶ。

【乾燥の道具】

①圧搾機：漉きあげた和紙の水分を、全体に圧をかけて、ゆっくりに絞る。

②刷毛（はけ）：和紙を乾燥さ

せる際、シワを伸ばす。薄い紙の場合は馬毛。それ以外は棕櫚の葉の刷毛を使う。

山鹿灯籠紙は椿の葉のつるつるした面でシワを伸ばしていく。

③干し板：昔は大きな干し板に、和紙を貼りつけ天日乾燥させていたが、現在では殆どの工房がボイラーの蒸気熱を送り熱した鉄板乾燥器を使っている。

板で乾燥させると、板の乾燥による収縮と紙の収縮率が同じなので均一に乾くので、よりしなやかな紙になります。

山鹿灯籠に使われる紙は、今でも天日乾燥したものを使用します。天日乾燥でないと、湿気で紙の腰が元に戻る為です。

「無くてはならないもの」

①トロロアオイ：粘液の原料で、

和紙の原料に加える「ねり」のもと。八女では「黄蜀葵根（おーれん）」とも呼んでいた。

トロロアオイの根を潰して水に漬けておいたものを攪拌（かくはん）し粘液を作る。

ねりを加えると、楮の繊維がむらなく水中に分散すること、漉いた時に簀からの水漏れが遅くなるので、紙の厚みを揃えることが出来る。このねりがなければ、繊維の比重は水よりも重いので沈んでしまう。

また、紙床から紙を一枚一枚はがす役目もある。夏場はねりが効かなくなりやすいことから、良い紙は冬場にできるといふ。

②現在では植物からではなく、人工的に合成した科学糊を使うこともある。